

特集

上越妙高花紀行
魅了する花々

夏の高田公園へ

蓮



第38回上越蓮まつり

7月21日(金)～8月15日(火)
問上越蓮まつり実行委員会事務局(上越観光コンベンション協会)
電025-543-2777 料観覧無料

幻想的な
世界へ誘う

夏の高田公園を彩るのは、
堀を埋め尽くす蓮。

緑の葉の中から顔をのぞかせる

紅白の花が、

清涼感あふれる美しさで

魅了する。

東洋一の美しさと称えられる 堀一面の蓮が上越の夏を彩る

食用から観賞用、
さらに観光資源へ

堀を埋め尽くす「東洋一の蓮」

夏になると高田公園の外堀では、濃い緑の葉の中から灯をともしたような紅白の花が顔をのぞかせる。東洋一と称される蓮の花だ。高田公園の蓮は、1871(明治4)年に戊辰戦争と凶作によって困窮した高田藩の財政を立て直すため、戸野目(ののめ)の大地主保坂貞吉が私財を投じ、堀に食用として蓮を植え、レンコンを育てたのが始まり。1953(昭和28)年、蓮研究で知られる大賀一郎博士が「蓮池の規模、紅白が入り混じつての群生」を賞賛し、東洋一と



言われるようになった。レンコンは1962(昭和37)年まで採取されていたが、以後は観賞用となった。

環境保護、蓮の花の保護のため、市民に関心を持ってもらうことを目的に、1977(昭和52)年に「蓮まつり」を開催。その後、より多くの人たちに高田公園の蓮を見てもらおうと、「東洋一の蓮」をキャッチフレーズにPR。観光資源として情報を発信し、蓮まつりを続けてきた。

周囲約4km、面積約19haに及ぶ外堀を、ほぼ埋め尽くすように蓮が咲き誇る。ほとんどが紅蓮だが、部分的に白蓮が入り混じって咲く。特に、外堀に架かる朱塗りの西堀橋と妙高山を背景にした蓮は素晴らしい。

さわやかな早朝に開花する 幻想的な蓮の花を愛でる時間

蓮の見頃は7月下旬から8月中旬で、今年で第38回を数える蓮まつりには物産展やお茶会、町家めぐり、写真展、オクトーバーフェストなど、各種イベントが催される予定。西堀北側の観蓮園では、東京農大の北村文雄教授から寄贈された12種類の新種の蓮のうち、一部が順調に育っており、こちらも見どころのひとつだ。

「蓮の花は早朝に開花します。さわやかな早朝の空気の中、幻想的な蓮の花とともにゆったりした時間をお楽しみいただきたいです」と、上越蓮まつり実行委員会の委員長を務める田中正人さん。蓮の花を觀賞しに来た人たちが、口々に「素晴らしい」「美しい」と賞賛し、上越が良いところだと言われていることが誇らしいという。

ところで、近年高田公園でも確認されている「双頭蓮」をご存知だろうか。1本の茎に花が2つ咲く蓮のことで、2〜3万個に1個という希少な個体とのこと。「幸せを呼ぶ」とも言われている。また、昨年は10万個に1個といわれる、1つの花に



上越蓮まつり実行委員会 委員長
田中 正人さん

花托が2つある「並てい蓮」が発見された。滅多に出逢えないが、探しつつ歩くのもまた違った楽しみがあつていい。また、蓮をテーマにした食事、「蓮御膳」「蓮の朝粥」もあり、花の觀賞とともに味わえば、旅の楽しみもより深まるだろう。



上越蓮まつりでは、無料のボランティアガイドによる案内もある。



1本の茎に花が2つ咲いた「双頭蓮」。昨年まで2年連続で確認されている。

「はすウォッチング」を通して 蓮の大切さを伝える活動を展開

蓮も桜同様、手入れが必要だ。前述の市民団体エコグリーンは、上越市が行っているアメリカザリガニやイネネクイハムシという害虫の捕獲などに協力している。イネネクイハムシは、幼虫が蓮の根を食い荒らし、8月頃に成虫になって飛び交う。大勢の人が訪れる公園だけに、堀の中にいる害虫を駆除するために薬剤を使用するわけにもいか

ない。そこで、黄色いものに寄ってくる成虫の習性を利用し、黄色のスノーボートを堀に浮かべるなど、工夫を凝らした駆除を実行。このほか、「はすウォッチング」や蓮の果托を使ったクラフトづくりなどを通して、蓮の魅力や大切さを伝えている。

「桜に比べると蓮はまだPRが足りません。最終的には、四季折々の上越市を発信していきたいと思っています」と、青木さん。さまざまな花が彩る上越市。お気に入りの花を目当てに訪れてみてはいかがだろうか。



堀の周りには出店や写真の展示もあり、併せて楽しみたい。



高田公園の蓮の葉を使った「はすそば」は、お土産にも人気。



はすウォッチングの様子。

